

亡びたアラブ・アード族伝承（3）

—長命者ルクマーンのこと—

堀 内 勝*

Transmissions of the 'Ād — a Ruined Arab Tribe — (3)

Masaru HORIUCHI*

はじめに

ここではアード族伝承の中、メッカに雨乞いに出かけ、その後長命を許されイエメンで余命を送ったとされるルクマーン・イブン・アード Luqmān ibn 'Ād について述べる。便宜上「長命者ルクマーン Luqmān al-Mu'ammar」としておく。というのは、ルクマーンについてはもう一人教訓や寓話の主人公とされる賢者ルクマーンがいるからである。後者については系譜が3説あり、とりあえず賢者ルクマーン Luqmān al-Ḥakīmとしておく。

賢者ルクマーンの教訓や寓話の中には、長命者ルクマーンの話も混じっていることが考えられる。何故ならば、長生きすれば、それだけ知識と経験を積み、人々への教えや論しも多々あろうし、ましてやいずれも有史以前の存在であり、同名であることも手伝って混同され一緒に理解されている可能性が大だからである。

第1節では長命者ルクマーンの系譜及び家族、第2節では長命者ルクマーンの事蹟として大別して述べる。なお第3節では賢者ルクマーンの系譜及び家族達、第4節では賢者ルクマーンの事蹟について論を追ってゆく予定であったが、語ることも多く、賢者ルクマーンについては本稿では割愛せざるを得ず、いずれ稿を改めて述べる。

*国際文化学科 (Department of Comparative Cultures)

第1節 長命者ルクマーンの系譜及び家族

1) ルクマーンの系譜

民間説話で名高いルクマーンは後述する賢者ルクマーンの方である。ここで述べるアード族伝説と結びついているのは長命者ルクマーンの方である。

長命者ルクマーンは、前稿アード族伝承(2)の中で述べたメッカ使節一団の中に初めて登場している。この4人の代表使節のうち、ルクマーンはルカイムと同じく Šudd (又はDudd) の家系に属していた。ルカイムの方はスッドまで系譜が辿り得るのに対して、ルクマーンの系譜の方は Luqmān ibn ‘Ād ibn Fulān ibn Fulān ibn Šudd (又はDudd) ibn ‘Ād al-Akbar と al-Ṭabarī (稿末資料⑬p.219) と記される。祖父、曾祖父の名 Fulān とは「誰それ」の意味で名前が明別できない時、明別しない時の言い方であり、従って系譜が2代途切れていることになる。

祖父の名は3種知られており、その一つを al-Kibr としているのは al-Hamdānī (資料③ p.35) である。他の2つは ‘Ād 又は ‘Ādiyā であり、ともに al-Mas‘ūdī (資料⑨Ⅱ p.161) である。もとより祖父の情報はない。第1の名 Kibr とは善意では「偉大さ高貴さ」の、そうではない場合「横柄、尊大、高慢」の両義性を持つ。第3の名 ‘Ādiyā は ‘Ād の変化形で別に意味は無い。第2の祖父、また父アードの名前についてであるが、前稿末の図表⑨「アード族関連系譜」を一瞥すれば分る如く、アード族には散見される名前であって、特別の消息は知られていない。ルクマーン自体、雨乞い使節団のリーダーの一人に選ばれていることは父アードの地位や人格の影響もあるのかも知れない。

2) 妻バラークシュ

ルクマーンには女きょうだいが一人いた。名前も知られていないが、嫁いだ夫からはロクな子ができなかったので策を弄して子を得る話があり、それについては子供のところで述べる。

さて妻についてであるが、妻が一人であったかどうかは定かではない。というのもこの頃のことだから一夫多妻であったり、妾や女奴隷がいたこともあって、一人妻に限られない。後述する甥の誕生のエピソードなども夫婦関係はどうなっていたのか疑われる程の内容である。

妻(或いはその一人)はバラークシュと言った。バラークシュ Barāqish とは barqashah (多彩, まだら色, 雑色, 混乱, 移り気)の複数形であり、それが固有名詞となったものである。Abū barāqish というとはヒワ類の小鳥を意味する。我が国でもマヒワやカワラヒワの類は翼や体に黄色等きれいな彩色を身にまとった鳥である。この意味からきらびやかなハデ好きな、また勝気な女性が連想される。そしてバラークシュの部族はラクダの頭数が多く、その飼育のみか既に食用として美味の利用法も知る、おそらく豊かな、栄えた部族出であったろう。

一方のルクマーンの方のアード族は、ラクダのことに何の言及も無かったし、またラクダの食利用も知らなかった。ラクダ飼育や利用に関して同時代のサムード族伝承(これは半島北西部が舞台)は黒ラクダや神聖ラクダなどの事項ではっきり跡付けができるのに比して、アード族に関してはここで述べる妻バラークシシュに関して、しかもバラークシシュの妻の方の部族に関してラクダの記述が見られるのみである。サムード族と対比してこれはアード族自体の古さと地域性を証していることになるのだろうか。以下の「ラクダ肉」をめぐるエピソードは‘Askarī(資料①Ⅱ p.165)も伝えているが al-Maydānī(資料⑩Ⅱ p.15)の方がより詳細であるので、後者から引用しておこう。いずれも出所は al-Sharqī ibn al-Qaṭāmī という人物が伝える話となっている。

バラークシシュはルクマーン・イブン・アードの妻(imra’ah=女)であった。ルクマーンは Ḍudd 支族の出であった。アード族はそれまでラクダ(ibil)の肉を食べる習慣は無かった。バラークシシュとの間には息子(ghulām)が一人いた。この息子は母親の部族にルクマーンと共に滞在したことがあった。母方一族はルクマーン一行に宴を張ってくれて、ジャズール(肉用ラクダ jazūr pl. juzur)を何頭も屠ってもてなした。息子は父親のところにジャズールの骨付き肉(‘arq)を持ってきた。そこでルクマーンは息子にそれを食べさせ(自分も口に入れ)ながら尋ねた。「息子よ、これは何の肉かな?こんなにおいしいものは食べたことがない」。すると息子は「僕のおじさん達(akhwālī)が屠ってくれたジャズールだよ」と答えた。それを聞いてルクマーンは「ラクダ(ibil)の肉ってこんなにおいしいものなのか?」と声をあげた。すかさず妻バラークシシュは「jammilnā wa-jtamil!」と言った。(直訳は「私達をラクダ化せよ。またあなたもラクダになれ!」つまり「私達にラクダ肉を与えて下さい、あなたもラクダ肉を食べてみたら如何!」と言うことになる。jamilとは美しいの意味だが「(ラクダ肉の)溶けた脂肪」も意味し、最も美味なところである。jammilnāとは「私達にジャミールを食べさせてくれ」の、ijtamilとは「あなたは自分自身でジャミールを食べなさい」が直義である。)

バラークシシュの実家の部族は ibil(ラクダ)の頭数が最も多かった。味をしめたルクマーンは(もうとまらなかつた。大食漢ぶりを思う存分發揮して)妻の(部族中の)イビルを片っ端から屠殺して食べた。こうしてルクマーンに限らず彼の部族は juzūr(肉用ラクダ)を食べることが食習慣となった。そこで誰いうとなく、「バラークシシュは己の部族を害した」[‘alā ahli-hā tajnī(dallat/janat) Barāqish]というようになった。良かれと思ってなしたことが悪く結果したことの例えとされる。

「バラークシシュは己の部族を害した」の由来は他に二つあり、一つはバラークシシュは「犬の名前」としており、ベドウィンの一部族がガズワ(襲撃)にあつて逃避した。バラークシシュも行動を共にしたのだが、よそ人が近づくといつもの癖で吠えかかってしまった。逃避場所が露顯して最悪の結果となって、この諺を生んだというのだ。(Maydanī ⑩Ⅱ p.14, ‘Askarī ①Ⅱ p.165)

他の一つは Abū ‘Amr ibn al-Alā’ が伝えるもので、バラークシュはアラブの一王国の妃であって、王の遠征の留守中、破目をはずしてしまって王妃の仕女の一が煙をたいてしまった。この煙はのろしの合図で、城に何か不測の事態が生じた時、近くの駐屯地から軍が即刻かけつけることになっていた。かけつけた軍は何でもなく、たわむれだと分ると、王妃に2度とこんなことをしたら誰も信ぜず兵もかけつけることがないだろうと忠告すると、この王妃は兵がかかけなくても良いよう砦を築くよう命じ、王宮に面して岩を築いてしまった。帰国して仔細を聞かされた王はこの諺を発したという。(Maydānī ⑩ II pp.14-15)

3) ルクマーンの子供

ルクマーンには息子と娘が存在し、少なくとも一人づつは資料に見い出されている。前節の妻バラークシュの逸話の中に幼い息子が登場している。この息子が、後述するルカームであるかどうかは定かではない。ルカームは長じてルクマーンに劣らぬ賢者ぶりを見せる。

以下のエピソードはルクマーンが己の女きょうだいに孕ませた子の一件である。『旧約聖書』のロトと二人の娘の話を思わせる類話として興味深い。‘Askarī (資料① II p.386) から引用しよう。

ルクマーン・イブン・アードには女きょうだいがいた。彼女は勇ましい息子 (Ibn Shujā’) が生まれるよう切に願った。というのも彼女の夫が病弱であったからだ。そこでこの女は兄弟ルクマーンの妻バラークシュに一晚だけルクマーンの寝所を貸してくれるよう頼んできたので、バラークシュもそれも良いだろうと言う通りにした。

〔別説 (Jāhiz ⑥ I p.184) では、この女きょうだいはルクマーンの妻に言った。「わたしは愚かな子供ばかりさずかってしまったわ。ルクマーンは賢くて高貴でそのような子供を持っているわ。わたしは今夜は ṭuhr (妊娠可能な状態) なの。私のために今夜を見逃して (夫を貸して) ちょうだい」と。〕ルクマーンは (酒を飲ませられ) 酔った状態でこの女と寝所を共にした。こうしてこの女は子種を子宮に宿したのであった。明くる日の夜、ルクマーンが妻のもとにきていった、「ḥirun ma‘rūf (女のあそこは知れたこと!)」と。これは「周知のこと、状況がそうであれば当然そうなる」の意味で、諺となった。

(ḥir とは ḥirḥ の省略形で「女性の外陰部」の意味であり、複数は aḥrāḥ, ḥirūn とされる。そしてこの動詞 ḥaraḥa は「ḥir を打つ、犯す」の意味となる。)

こうしてルクマーンと女きょうだいとの間にルカーム Luqaym という息子が生まれたとされる。名前からしてルクマーンの前提があつての存在である。というのもルカームとはルクマーン Luqmān の語幹 lqm の指小辞形だからである。とは言えルカームとは前稿末アード族関連系譜の固有名を見てゆくと、アード同様にこの民族には多々散見される名前であって、むしろ

ルクマーンの方が稀であることは申し添えておかねばなるまい。

この子は非常に聡明で、それ故にルクマーンに疎んじられた程でもあった。そのエピソードは寓話の一つとして本節の最後で述べよう。

利発であったルクマーンの子ルカイムは、後世小ルクマーン Luqmān al-aṣghar としても知られる。「ルクマーン2世」の意だが、恐らくこの子が存命中からこの名を得ていたことが推定される。ジャーヒズ (d.868/9) はその著 al-Bayān の中で qadr (能力), riyāṣah (指導力), bayān (論証力), khiṭābah (説教), ḥikmah (教訓), dahā (賢明さ), nakrā' (狡猾さ) の分野において、古人では7人が傑出しているとして、ルクマーンの次に名を挙げている。すなわち「ルクマーン Luqmān ibn 'Ād, ルカイム Luqaym ibn Luqmān, ムジャーシウ Mujāshi' ibn Dārim, サリート Salīṭ ibn Ka'b ibn Yarbā', ルアー Lu'ā ibn Ghālib, クッス Quss ibn Sā'idah, クサイー Quṣayy ibn Kilāb である」(資料⑤ I p.365) とこのように評価している。

ルカイムに関して、その聡明さを謳った2つの詩が知られている。一つはルカイムの qudr (有能さ), 'izām (偉大さ) を賞讃したもので詩人はナミル al-Namir ibn Tawlab。ウクル族出のムハドラム詩人で(プレ・イスラム期からイスラム期に活躍し)ムスリムに改宗し、長命で知られた。

ルクマーンの子ルカイム／父のきょうだいから生まる、
父の女きょうだいの子／男児として生まれたり。

彼夜に酒飲みて／前後不覚になりし時にも／
彼女子種を得たり／闇夜に乗り欺きければ！

さすが利智なる男も／欺かれて交わる／
そして生まれた息子／利智なる男となれる。

(al-Jāhīz 資料⑤ I p.184)

次の詩はベッシミストの盲目詩人バッシャール Bashshār ibn Burd (d. 784) の女性の男性と同様浮世を楽しむべしとする詩である。

女性よ、さ一起きて朝酒を飲もう／人の子はたとえ、墓の土と化し／細かな小石に裂
け散ろうとも／石で創造されているわけではない。

女性よさ一起きて朝酒を飲もう／人の運命は流転変化するもの／ルカイムとて亡び去
り／ヒルマース⁽¹⁾の人々とて今は無し。

今日は酒をあび明日から／知識・情報を求めれば良い／良いこともあれば心配もあ
る／それが浮き世の日々なのさ。

されば甘受して飲め／浮き世の良きこと悪きこと／憂さにくよくよせずと／時運の盃を飲み干せ。

- (1) ヒルマースとは Hermas のことで2世紀頃キリスト教徒に悔い改めを説いた『ヘルマスの牧者』の作者で北メソポタミアのニシビーンで活躍した人物。

(al-Jāhiz ⑤ I p.187)

ルクマーンには娘があつて、その名前も知られている。スフル Şuḥr という名前であつたが、Şuḥr ibnatu Luqmān (ルクマーンの娘スフル) 又は Şaḥr ukhtu Luqaym (ルカイムの兄妹又は姉弟スフル) との関係名で出てくることが多い。後者の関係名は以下の経緯から ukhtu はこの場合「兄妹」との関係とみて良い。ジャーヒズは以下の残酷な話と諺を伝えている。

ルクマーンの女のきょうだいは、先にも言及したように、「aḥmaq (愚かな子) ばかり産む女」の意味で muḥmaq 又は muḥmaqah と呼ばれていたのだが、賢い子ルカイムを得たことにより多に気を良くし、もう一人賢い子を持って munjibah (完全な子に育てる母、良妻賢母) となるべく、ルクマーンの妻に頼んで再び彼と交った。

しかし産まれたこのスフルと名付けた女の子はとんでもない愚か者で破廉恥な事態をし出かすばかりの娘となってしまった。仕方なくルクマーンは「Anti aydan imra'a お前もやはり(あの類の、ロクでなしの)女だ」と言って殺してしまった。

不名誉を起さないため、家の家系の威信を保つため、当然なこととして行うことを意味している。'arḍ (家、女、子供を守るべき男の倫理) のため、敢えて無理な、理不尽なことをせねばならないことを言う。「ルクマーンが娘スフルを殺すことによって、bi-qatli Luqmāna ibnatahu Şuḥr」も同じ意味の諺となった。(Jāhiz ⑥ I pp.21-22)

以下の「賢明な甥」が上述の女性の子かは定かではない。しかし、ルクマーンの賢さを引継いでいることは明らかである。この話では若者であるのに老人ルクマーン以上の医術の知識と経験を保持していることが語られる。

甥の助言：一人の金持の男がいた。彼はしかし重い病気にかかっていた。医者が言うには、「彼は死ぬことになろう。というも彼の体の中にある動物が巣くっていて心臓を掴んでいるからだ」と。ある動物とは、ある種の蛇に違いないと考えられた。そうした蛇は、人間が黄色のメロンが生育する畑で眠りにつくと、特に若い蛇は人間の開いた口から体内に滑り込み、胃の中に巣くってその犠牲者を養うべき食糧を横取りして、のうのうと過ごすと思われていた。この金持が万策尽きて最後に頼ったのがルクマーンであった。

ルクマーンは金持に言った。「病気から救う手立ては只一つしかない。しかしそれは非常

に危険が伴うものだ」と。病人は人生のこの最後の機会に賭けることにした。そこで病人はカーディー（判事）、ムフティー（法官）、貴族院の代議士達を招いて、これらの人々の面前で、ある書類にサインをし封をした。ルクマーンがこれから行う手術がもとで病人を死なせたとしても、ルクマーンには何ら非難されることはない、という文面であった。これが終ると病人は友人や親戚達と別れを告げた。

ルクマーンは手術をするに当って、町中のすべての医者呼んで手術の手助けをするよう頼んだ。そして何よりもまず嫉妬による邪悪をしないように誓わせた。しかしルクマーンも只一人の医者のみは招くことをしなかった。その医者は甥、つまり彼の姉妹の息子であり、非常に嫉妬深くうらやましがり屋であったが、技の点ではルクマーンよりも上に達している面もあった。（こうした反目が血の繋がった者同志に存在するのは当然のことであった。この事情の人々が次のように言っている。もし甥すなわち己の姉妹の息子が無かったならば、そして愚かにも一人ぐらい欲しいと望むならば、土塊を一固まりとして自分自身に似せた像を作り、それが完璧に仕上がったならば、首をはねよ！ 万が一、生きて帰って、あなたに害をあたえるようなことがあるかも知れないからである。）

さてこの甥であるが、招かれなかったとは言え、ルクマーンの手術を目にしたいと心に決めた。そこで甥は家の屋上にのぼった。そこには彼の知っている小窓があって、そこから病人の部屋を覗き込めたし、そこで行われることすべてを目にすることができるのである。

一方ルクマーンは患者に banj（ヒヨス：ナス科の植物で催眠剤になる）を処方して、催眠効果があらわれてくるやいなや、彼を横たえ、メスを手に切開を始めた。切開手術が進む中に患者の心臓にまわりつく巨大なカニのような生き物が顕わになった。

ルクマーンはこれを目にするとさすがに勇気を失い、「これこそ間違いなく病気の元凶である。だが見ず知らずのこの生き物をどのように取り除いたら良いものやら。諸君のうちにこの対処法を知っている者がおられたならば、お願いだからそれを教えて欲しい」と声をかけた。並居る医者達は「我々誰一人としてその生き物を取除く方は存じておりません。力づくで取除こうものなら、それは心臓にますますきつくしがみつき患者を殺してしまうことになりましょう」との答え。しかしこの答えが終るか終らないうちに、ルクマーンも驚き、恥入ったことであったが、屋根裏から目には見えない観察者の声が部屋の中に飛び込んできた。「火を用いるのだ、このロバめ！」。この好機を得た忠告に接してルクマーンは同僚の一人を屠殺屋街にやってシシカバブ屋で肉を焙っている店子に串1本を借り受けさせた。

また一方他の者に火を起すよう、また他の者には綿毛を持参するよう命じた。用意万端整うと賢者ルクマーンは取手用に鉄串の一方の端に布をまきつけて、他方の端を火の中に突き刺し真赤になるまでにさせた、また助手の医者には綿毛のパッドの小さなものをいくつか作らせた。こうして鉄串が真赤になった時、手術者はそれを生き物の爪の一つに当てた。と、この突然の火痛にたまらず、生き物はその爪を上げざるを得なかった。すると綿毛パッドが空いた間にさし挟まれた。同じ様にして生き物の爪すべてがはがされていき、この怪物自体も患者にはさし

たる危険もなく取り払うことができた。

その後ルクマーンは傷口をきれいにすべく銀のスプーンを使用しようとした。すると屋根の上の甥が叫んだ。「人間の心臓を金属で触れるな」と。ルクマーンはそこで木片をとって、それをスプーン代りに用いた。そして心臓の傷を油脂で塗った後、患者の切開した胸を縫い合わせた。患者はその後健康を回復し、長命を楽しんだ。(Hanauer ④ pp.20-22)

第2節 長命者ルクマーンの活動

長命者ルクマーンに関しては、アード族滅亡時の身の処し方として長命が許されたこと、メッカを離れ半島南部で生を送ったこと。驚ルバドと伴に生を終えたこと。一説としてマアリブのダム、アデンの貯水池の建設が彼に帰せられること、などが知られる。

1 長命伝承

1-1) 長命を許される

アード族滅亡時、メッカ雨乞いの一団は滅亡を免れたわけであった。この一団のその後はどうなったのか。団の中、4人の代表の身の処し方は三様に分れた。前稿第五節で述べたように団長カイル・イブン・アンズは同朋の滅亡の耐えるに忍びないとして、多くの団員を率いて故郷に戻り、一族と結末を共にした。

マルサドはもともと隠れ一神教徒であったのでメッカに滞まることにし、またルカイムはメッカに姻族が居た関係上、同じくメッカに滞まった。このマルサドとルカイムの少数の一団はメッカの寄留民となって、バヌー・ルーズィッヤ Banū al-Lūdhīyyah と呼ばれた。「ルズ（又はルデ）の人々」の意である。ルデとはセムの5人の息子の中、第4番目の息子であるから、セムの5番目の息子イラムの家系（アード族）から、ルデの家系（アマーレク族）に寄留民として移ったことになる。ルデについては聖書学ではアナトリア南部に移動したとしてリュディアと同一視する説を有力視する程に混乱している。（例えば『旧約・新約聖書大事典』教文館 p.1156, 1290）

さてルクマーンであるが、上述の代表団とは別の生き方をとった。ルクマーンにも神は身の処し方の選択を迫った。ルクマーンがカアバの主に願ったのは永生（'umr）であった。しかし願いは永生は神のみということであり無理であるが、その代わり khuld（長生き）を許そうということになった。以下の4つの中から選べというわけである。それらは従って長命のもの、長く無くならないものの例えとなっている。

1. 羊の7粒の糞が残存するまで、即ち消えてなくなるまで
2. 山中の雄猪 ('ufr fi jabal) の寿命
3. 露のみを水分として生きるカモシカ (原語 wa'r では意が通じず wa'l とすべき)
4. 7度生き返る7鷺 (sab'ah ansur)

この4つの長命のもの、1. ay'ār, 2. 'ufr, 3. wa'r, 4. ansur と [r] の脚韻を踏ませたために、1や3に中・近代以降では意味・記号内容が異なる齟齬が生じている。

1-2) ルクマーン、鷺ルバドと共に

さてルクマーンは4つから最後の「7鷺」を選んだ。かくしてルクマーンは7つの鷺が生きる間の長命を与えられ、実際生きたことになっている。一羽の鷺が卵からかえると、その雛鳥を受取った。雛の時から死ぬまで面倒をみた。その雛が雄であれば、その力強さをも共有できた。一羽が死ぬと、代わりの一羽の雛を受取り、このように代替りをして遂に7羽目の代になった。鷺は80年の寿命だとも400年の寿命だとも考えられていた。7番目の鷺しか残されなくなった時、甥の一人がルクマーンに言った。「叔父さん！おじさんの生きるのも、もうこの鷺の寿命だけしか残されなくなっていましたね。」するとルクマーンは答えて「甥っ子よ！それだからこの鷺（の名）はルバド (Lubad) と名付けたのだよ」と。ルバドとはアード族方言であって、dahr（長持するもの、長期に及ぶもの）を意味する。

さて、こうしてルクマーンの鷺ルバドに来るべき時がきて、その寿命が尽きる段になった。朝になって鷺達が一斉に山頂から飛び立って行った。しかしその鷺達の中にルバドの舞う姿は無かった。ルクマーンの歴代の鷺達は（生きている限りは）彼の視界から消えるということは無かった。常に視界の範囲に居たのである。

ルクマーンは他の鷺と一緒にルバドが舞っていないのを目で確かめると、ルバドに何が生じたのかを知るべくその山に登って行った。しかしルクマーン本人自身の中にもかつて経験したことがない程の wahn（衰弱）を感じていた。山頂に登りきって彼の鷺ルバドを探して目をやると、ルバドはいつもと異なり、飛立えずにもがいていた。ルクマーンは声をかけた。「ルバド、立て！」と。だがルバドは立とうとさらにもがいたが叶わなかった。その qawādim（翼の雨覆い）は裸出して、既に抜け落ちていたのだ。そしてその地でルクマーンとルバドは共に死に果てることになった。

「ルバドにも寿命は来るもの」 atā 'abadun 'alā Lubada（傍線部 ata l-'abadu の説あり）との有名な諺（Damīrī 資料② II p.61, 'Askarī 資料① I p.126, Zamakhsharī 資料①⑥ I p.36）はこの折の、自分にも言い聞かせたルクマーンの発した言葉だとされる。この諺は「どんなに長生きしても寿命は来るもの、古いものはいずれは廃れる」の意味で用いられる。

ルクマーンの最後を共に生きたルバド。しかしルバドがどんな鷺であったのか姿形、性格、エピソードなど上述のものしかないことは奇妙なことだ。というのも長命な鷺の代表として、

またルクマーンの愛した鷺として詩歌に、そして諺に頻出しているからである。

1-3) 諺言化, 詩に謳われたルバド

以下にジャーヒーリーヤ（プレイスラム期）から始まるアラブ・イスラム史の中で、ルバドが主題又は話題となっている作品を紹介する。諺の方を先に、詩作品の方を後にする。

1-3-1) 諺の中のルバド

先の諺「ルバドにも寿命は来るもの」で紹介したように、ルバドは「長命」を表わす代表のようになっている。もともと「鷺 nasr」そのものが偉容さ、尊大さの他に長生きするものの代名詞でもあった。

a'maru min nasr（鷺程に長命な）の諺がある（Maydānī ⑩ II p.50, 'Askarī ① II p.75, Zamakhsharī ⑩ I p.254, Damīrī ② II p.610）。

鷺が具体的にはルバドに集約されることから当然として、a'maru min Lubad（ルバド程に長命な）との諺もある。（Zamakhsharī ⑩ I p.253, 'Askarī ① II p.34）

鷺はもう一つ「視力の良さ」の代表ともなっていることを申し添えよう。

abṣaru min nasr（鷺程に目の効く、眼力の良い）との諺がある（Zamakhsharī ⑩ I p.22）。

我が国の「鵜の目鷹の目」も目の良さ、鋭さから由って来たものである。鷹も鷺も同類である。

「長命」は必ずしも良いことづくめではない。年をとってくると、身体や思考に異常を来たすことも多い。よばよばな体を引きずって生きていくことにもなる。老残の身となって生き続けることも大変である。老いとよばよばな体の状態、これをアラブは haram で表わす。このよばよばの状態は鳥、特に鷺鷹では「尾羽うち枯らす」という表現がピッタリであろう。羽ぶりのよかった者が零落した状態に用いられるわけであるが、

ahramu min Lubad（ルバド程に老いばれた／年をとった）

との諺（Maydānī ⑩ II p.409, Zamakhsharī ⑩ I p.442, 'Askarī ① II p.353, Damīrī ② II p.546）は、長生きして老残の身を、どちらかという、肯定的でない捕え方をした場合の言い方となっている。

1-3-2) 詩の中のルバド

長命で知られる鷺、その鷺の中でもルバドはより長命者であったルクマーンと共に生きた。長く生きるものにも限りがある。神を除いてはすべて時の限りを持つもの、長命で知られるルバドの生の限り。それをジャーヒーリーヤの大詩人 al-Nābighah (d.603頃) が廃墟と化した土地の喩えとして次のように謳う。

aḡhat xalaa'an wa-amsaa 'ahlu-ha ḡtamaluu

かの(栄えし)地 空虚となりぬ またその住人も移ろいてゆきぬ

'axnaa 'alay-ha l-laḡii 'axnaa 'alaa Lubadi

ルバドに襲いしもの(死の定め) またその地にも襲い来たるなり

(Ibn Qutaybah ⑧ p.627, Zamakhsharī ⑩ I p.37, Jāhiz ⑥ VI p.325, 'Askarī ① I p.126)

次の詩は189/803年に亡くなった高名の文人、特に文法学者としてならしたムアーズ・イブン・ムスリムを謳った詩である。ヘラートで生を送り、なりわいを衣服問屋に持ち、長命を享受し、子、孫、ひ孫までを身近に持って90才を超えて亡くなった人物である。アスカリーなどは「150年生きた」としている(① I p.127)。この人物をルクマーンの鷺ルバドに論えた詩が残っている。詩人は9世紀前半に活躍したイブン・ムナーズィル Muḥammad ibn Munādhir (又は Mawlā al-Qa'qā' ibn Shawr) である。

1. まことムアーズ・イブン・ムスリム⁽¹⁾はその寿命の長さにおいて 永遠の時と争うほど
の⁽²⁾男なり

(1) アスカリーではムアーズ・イブン・サーリム Mu'ādh ibn Salim になっている。

(2) [原文] qad ḡajja min ṭuuli 'umri-hi l-'abadu

[アスカリー及びダミーリーでは原文が異なり laysa li-miyqaati 'umri-hi 'amadu
(彼の寿命の区切りは極点に達する程の)]

2. 時の頭髮既に白く 時もまた髪を染めたり⁽¹⁾ されどムアーズの寿命の衣 折々に新た

(1) [原文] wa-xṭaḡaba d-dahru

[アスカリー及びダミーリー wa-ktahala d-dahru (後文訳、時もまたコホル〈アイ
シャドー〉を塗りたり)]

3. おおルクマーンの鷺よ⁽¹⁾ 汝如何程生きしや どれ程^{せい}生の衣を 着替えたことか⁽²⁾ おお
ルバドよ⁽³⁾

(1) アスカリー及びダミーリーでは yā bikra Hawwā'a (おおイヴの初子よ) とあり、ルクマーンをカイン・アベルとの兄弟とみなしている。

(2) アスカリーでは wa-kam tashabu ḡaila l-hayaati [どれ程一生の尾を引きずって(生き続けた) ことか!]

(3) アスカリーではこの3詩行目の前に別の詩行を置いている。

4. アダムの邸は既に 荒廃に帰してしまった ^{やしき} なのにあなたは 邸内の一人でありながら
大黒柱 ₍₁₎ の如く残る

(1) 大黒柱と訳した原語 watid とは、テントをその四方で支える「テント杭」のこと。

5. 達者なる汝言葉をかける 邸内にありて 足引摺るカラス達に 悪しきは頭かただれ目
かと ₍₁₎₍₂₎

(1) [原文] kayfa yakuunu ṣ-ṣudaa'u wa-r-ramadu
 (直訳：偏頭痛とただれ目はどのようなになったのかと)

(2) アスカリーはこの後に3詩行を続けている。

(Suyūṭī 資料⑫ II p.292, 'Askarī ① II p.546, Damīrī ② II p.546, Jāhiz ⑥ VI pp.327-28)

ブレイスラム期に大詩人として活躍したラビード Labīd ibn Rabī'ah (560頃～661頃) もルバドと運命を共にしたルクマーンを次のように叙している。

1. ルバドにも時が流れ、世の移り変わりも、その(限られた)時期に至った。
 時の重圧にうちひしがれたわけではなかったが、

2. ルバド、仲間の鷺達の飛び立つのを見たとき、翼開き上げた。
 しかしそれは飛び立てぬ鳥のもがく哀れなもの ₍₁₎ であった。

(1) 別説では qaṣīr (羽短かきもの→羽欠けるもの) とある

3. 下から見上げるルクマーン 彼の飛立つを ₍₁₎ 必死に乞うた
 今なおそれは不可能ではあるまいと願いつつ

(1) naḥḍa-hu を naf'a-hu [(飛立つに) 成巧せんことを] とする説あり。

(Zamakhsharī ⑩ I pp.36-37, Ibn Qutaybah ⑧ p.627, Jāhiz ⑥ VI pp.326-27)

2) 建設者伝承

2-1) Sudd Ma'rib (マアリブダム) のこと

イエメンと言えば、東部砂漠にあるマアリブ・ダム Sudd Ma'rib が世界的に有名である。紀元前2000年紀後半に造築され、その影響で灌漑が潤い農業の発展をみてシェバ王国も栄えたとされる。アラブ・イスラム史ではこのダムの決壊が南アラビアの諸部族の四散、北方移住を余儀なくし、北アラビア部族との離合集散を生んで、イスラム期直前からそれ以降の歴史を育くんでゆくことになっている。現在でもダムの両端の堤防の遺跡は見学でき、その巨大さ、巧みさ、装飾の工夫などを見ることができる。そしてこの遺構の上流に現イエメン政府胆入りの現代のダム、マアリブ湖が1988年造営され、ここも堰上を歩いて見学できるようになった。

前稿第8節で言及した如くルクマーンがメッカを去ってから南のイエメンの方に向かったことは述べられている。またルバドとの一件も良く知られてはいるが、それが一体どこであったのかは地域設定が定かでない。イエメンに王国を作り、サバアの国の礎石を作ったことを述べている資料があり、マアリブのダム、アデン・タンクを築造して、国を安定させたとする説がある。マアリブのダムを長命者ルクマーンが築いた、とするのは Yāqūt (資料⑭ V p.34) や al-Mas'ūdī (資料⑨ II p.161) 他である。イエメンに関する歴史・地誌に詳しい al-Hamdānī (資料③ p.35) も3人の名を挙げ、最初にルクマーンに言及している。

私は2004年3月2日～5日、イエメンのサヌアからマアリブへ出かけ、この太古マアリブのダム、近年建設された新ダム、アッワーム宮殿跡、マアリブの旧市街を訪ね歩いた。個人で旅行社に予約を入れて運転手付きの四駆で出かけたにもかかわらず、首都サヌアを南に抜け出した山腹で小1時間待たされた。そこには続々と四駆車、サローン、さらに何台もの観光大型バスが集結してきたのだ。そしてややあって出発したのが驚いた。何10台という中・大型の自動車が数珠つなぎのように連なってゆくのだ。私の四駆車もたちまちその中に紛れ込むものとなった。そしてこの車列の前後には機関銃を2台ずつ構えた兵士ら7、8名を乗せた軍用車が付いたのだ。アマリブ地区はもともと部族間抗争の激しかった上に、新ダム建設で政府と部族の間でも不和が伝えられ危険地帯というので、このような警護が必要であったのだ。サヌア・マアリブ間は2000mを超える高地から東の低地砂漠に向かうので、ただただ下る道であり、それだけに景色は素晴らしかった。車列も2度見晴らしの良い所で小休止してくれて、見下ろす絶景を楽しませてくれるサービスがあった。4・5時間でマアリブに着き、バルキースホテルに滞在した。

新設のホテルで庭の手入れもよく、木々も適度に生育し日陰を作っていた。さながらマアリブダムで潤されていた2つの園もこんなであろうかと想像された。

コーラン34章サバの章には次のように記されている。「サバウ(の地)には(神からの)一つの徴しがあった。右に1つの、また左に1つの、2つの(農)園がそれである。(そして神は言われた)「あなたたちの主の賜われる食ものを(そこで、そこから)食べなさい。そして主に感

謝しなさい。サバウは立派な土地であり、また主は悔い改めを許される方である」(34:15)。「しかしサバウの人々は(神に)背を向けてしまった。そこで我ら(神)は‘Arim(大洪水の固有名)の洪水を彼らの上に送りこんだ。そしてその二つの樂園を khamṭ(塩辛い)果実 athl(ぎょ柳)の実、それに僅かの sidr(ハマナツメの一種)の食物しか産まぬ園に変えてしまった」(34:16),「それは忘恩の報いである。我々は忘恩以外に報いはしないことがあろうか…。」(34:17)。

さながら天国そのままであったマアリブの右の園と左の園の様子を、コーラン註釈者ザマフシャリーは次のように叙している：この国は最も実り豊かで、良い国であった。女が頭に mik-tal(ナツメ椰子の葉で編んだ籠)を乗せ、木々の間を通りながら両手で籠をしっかりとつかんでさえいれば渋くはない熟れた甘い果実がその中に落ちてきて、その籠を一杯にしてしまう程である。またこの園の中には ba‘ūd(蚊又はブヨ)もいなければ dhubāb(ハエ)も, burghūth(蚤)も, ‘aqrab(サソリ)も ḥayyah(蛇)もいなかった。(Zamakhārī ⑮Ⅲ p.285) (Qurṭubī ⑩Ⅵ p.5366)



[写真1]

1988年完成した現代のアマリブ湖、上流を見る。

中世においては現在見るよりはるかに多く、その栄光の残存を見ることができたろう。農園の遺構もかつての素晴らしさを想像裡に描けたことであろう。

今ではその上流に大きなダムを作り、水をたたえている湖を作り出した。この堰堤の高さは30メートル以上、車でも上ってゆくことができ、堰堤上は見事な見晴しを眺望でき、アスファルトの道路が堰堤上を走っている。一周はできるようになっておらず、ただ流水を堰き止めている下流の堤防上のみがその見学を許されている。（写真1 参照）

このダムが築かれる以前、私は今から22年前の1982年、50日かけて北イエメンを旅した。その折にマアリブを訪れ、旧市街唯一の宿マアリブホテルの丘上の最上階で一夜を明かした。折しも寝ながらの満月と丁度水流のあったワーディー・アザナの川面の幻想的な、さながら別世界にいる光景を目に焼きつけた。そして翌日サヌアのイフワホテルで親しくなったアフマッド氏の消息を求めて上流にゆき、そこで2泊した。

川床にはモスクがあり、氏の大きくはない家は土手上に何軒かあるその一つであった。22年後の今、彼の消息を知ろうとトワイマーン族のことをガイドやホテルのカウンターで尋ねると、意外なしぶい表情になった。そして危険だから動き回るな、へたに見つかったら銃で撃たれることになるとの返答。ことの起りは矢張この近代的ダムの建設をめぐるものであった。

建設を強引に推進する政府と建設されれば治安及び水没の問題をかかえる部族とが敵対反目の状態に陥ってしまったことだ。云わば政府と部族が内乱状態にあるのが現状だという。そう言えば思い当たる節がいくつもある。22年前のアフマッド氏とのホテル屋上で虹を見ながらの対話で分ったことだが、彼が部族代表で政府にダム建設は行わないよう陳情に来て交渉を行っていた折であったこと。氏の家の周囲及びワジ底の農園を眺めさせてもらったが、そこにはゾッラ（モロコシ）や雑穀に混って青野菜まで生育していたこと。マアリブ湖ができた分、氏の家も農園もそしてあのモスクもダム底に水没していること。その間の氏の無念さが今や怒りとなって、政府そして外来者に向けられていることが想像された。アフマッド氏は雄弁で知性豊かな人だった。それ故に選ばれて部族代表団の一員として首都にも来ていたのだった。私にも宗教のこと、文学のこと、そしてその辺りの習慣について教えてくれた。当時1番上の娘は14・5才、朝と午後、羊・ヤギを連れて放牧に出かけ、下にもう一人の女子と幼い長男がいた。末子で男なので随分と甘やかされて育っていた。皆今はどこに移ってどう暮らしているのだろうか。

回りに護衛車が何台もつき、バスを連ねての一員となっていた現在の私にはどうしようもなく、アフマッド氏との再会は断念せざるを得なくなった。そんなことを思いながら湖上の道路を散策したものだった。しかしそれにしても、この砂漠の中によくもこれだけのものを築き上げたものである。主体のバラク山やその西部にある山々から少量ずつ合流してくる水流は一つの大きなワジ（涸川）に合流して北東に向かう。そのワジはワーディー・アザナ Wādī Adhana 又はワーディー・ザナと呼ばれる。このアザナ・ワジが最後に狭まる地点、ここにマアリブのダムが築造されたわけである。このマアリブのダムはそのまま Sudd Ma'rib として

も知られるが、アラブ・イスラム世界ではアリムダム Sudd al-'Arim としてさらに有名である。このアリムとは「水量が増す、貯水する」などの動名詞型で Sudd (さえぎる、堰止める) とはほぼ同じく堰堤、貯水地(池)の意味である。そしてこのダムの崩壊のことが先に見た如くコーラン34章に、アリムの洪水 Sayl al-'Arim として記されているために、アリムダムの名はイスラム伝播とともに既知のものとなった。背後の山をバラク山 Jabal Barak という。このバラク山を割って西から東に流出するのがアザナワジである。この峡谷は従って南北にバラク山を割って北側をキブリー (Qibli, メッカの方角) と、南側を中央 (Awsaṭ) と呼んだ。バラク山は南側にさらに長く続くから、「中央」とは「本体」の意味でもあろう。アリムダムはこのバラク山の東端の岩石群を巧みに利用し、およそ350mに亘る Sudd (堰) を設けたのである。高さは35m程と言われているが、今では中央部は消失し、殆んどが流砂で厚く埋め尽くされている。我々が実見できるのは両側の水路に導く側壁部にすぎない。コーランに「右に一つ、左に一つの、二つの農園」とうたわれていたが、アリムダムは両端に排水口が設けられていた。これを上手、上流側からみて、右の園、左の園と言っているようだ。即ち西から東に向かって左側、即ちバラク山のキブリー側に排水口二つ、バラク山のアウサト側に排水口一つが設けられルブウ・ル・ハーリー大砂漠の西端、現在のラムラト・サブアティーン砂漠を農地と化し、水で潤していたのである。左水門からはマアリブ市を含む北側の農地を、そして右水門からはアッワーム神殿を含む南側の農地を緑豊かに潤していたのである。左水門は排水口が二つ設けられているため、三つの堰堤から成っている。前二つの堤は山本体とは切離され、水流が通れる工夫がされている。ワーディーの鉄砲水のことを考えれば、これは大変な造作であったろう。岩板上に石組が積み上げられてゆくのであるが、堤のいずれもが大きな石での組合わせである。1番奥の三番手の堤はバラク山に密着しており、水流は北から東に向かって排水されることになる。この堤は長く、150mほど続き、先端程下流になるので高く幅広になる。15m程の高さになろうか。先端部はゆるやかな円形で、表面も滑石で覆われ、きれいな修復を見せているが、最上部の2～3mは泥土で固めてあるので、そのチグハグさが目立つ。(写真2 参照)

3つの堰堤間はほぼ等分で3mほど、2番目と3番目間は歩いて調査できるが、1番目と2番目の間は石積み堀が作られており、通行できない。おそらく崩れかかった部分があり危険なのであろう。1番目も3番目も修復がなされていない所も多く危険はあるのだが、2番目程ではない、ということであろう。

1つ目の堰堤は長方形ではなく、貯水を排水するため鋭角の三角形となり、崩れた高い塔が見てとられる。このキブリー側では最も高い建築物である。右側の堰堤と比較してみれば分るが、恐らくこの倍以上の高さで反対側と高さの平衡を保ち、巨大なダムの堰止めの基となっていたのであろう。

右堰堤は、左のそれに比べて、随分原型を留めており、太古もこのように建てられ、見る人を魅了したろうと思われる遺構である。大きな岩板の上に屹立しているその巨大さは、いかにも巨人族に属したルクマーンが建てたことを想像させるに十分である。基礎となる岩板も向か

って左側に傾斜して積み重なっている岩層で高さも５～１０ｍ程に達する。

その岩板の上に貯水面を最も高くして９層構造の側の堰堤となっている。貯水口には角塔が反対側と向き合う形であり、その横バラク山側には同じ高さの円塔が設けられている。

この９層構造の中、貯水面の３面と下流となる先端部８・９面は補修がほぼ終わっており、きれいな滑石で表面が飾られている。しかし中間壁４・５・６・７面は恐らくこれらが放置されたままの石組の骨格なのであろう。壁面に垂直に組み込まれている石材群は、荒々しく外面に突出して、凸凹の壁面となっている。恐らく壁面は滑石を用いて、つなぎ目は漆喰で補填して、美しく仕上げたことであろう。漆喰で外面を白く塗るのは水分の浸透を防ぐ手段でもあり、また美しい装飾ともなるからであり、現在もなおイエメン建築においては窓際など漆喰で装飾する習慣がある。右堰堤はワジ側からは陰しくて接近できない。かろうじてバラク山の背後から急な岩板や砂の傾斜に足をとられながらいくつかに近づけるだけであろう。上から見ると、上流は岩だらけ、下流は砂だらけといった両極端に驚きを禁じえない。上流の形象は太古以来砂の堆積を除いたら、そう違いはないのであろう。歩行も困難な程凹凸のある溶岩に覆われている。



〔写真２〕

水を左の園に導き入れる水路跡。キブリー山の突き出た岩板を巧みに堰堤に繋げた。左手から第１、第２堤と続き、右手の第３堤は約１５０ｍ



【写真3】

水を右の園に導き入れる堰堤。こちらは保存が良く、次第に下る様を長く続く遺蹟が物語る。

バラク山の本体である溶岩が裸出しているといった状態である。上流のかなたにある新ダムも岩山に隠れて眺むことができない。一方下流である東の方は、辺り一面砂漠であり、少し小高くなった砂丘が点在するだけの茫漠とした様で、あちらこちらに1筋2筋の小さな旋風が黄色い柱を動かしているだけである。緑の様を言えば柳のように垂れたタマリスク、高くはないが幹を垂直に立てて唯一の喬木の姿を見せるスイドル（キリストイバラ）、それに地を這うように横に枝を広げるアラクだけであり、コーランにその成れの果てが叙されているように草は僅かうす緑の芯の強い葉をいくつか伸ばす khamṭ (塩辛草) のみである。

2-2) アデンのサハーリージェ・タウィーラ（貯水タンク）のこと。

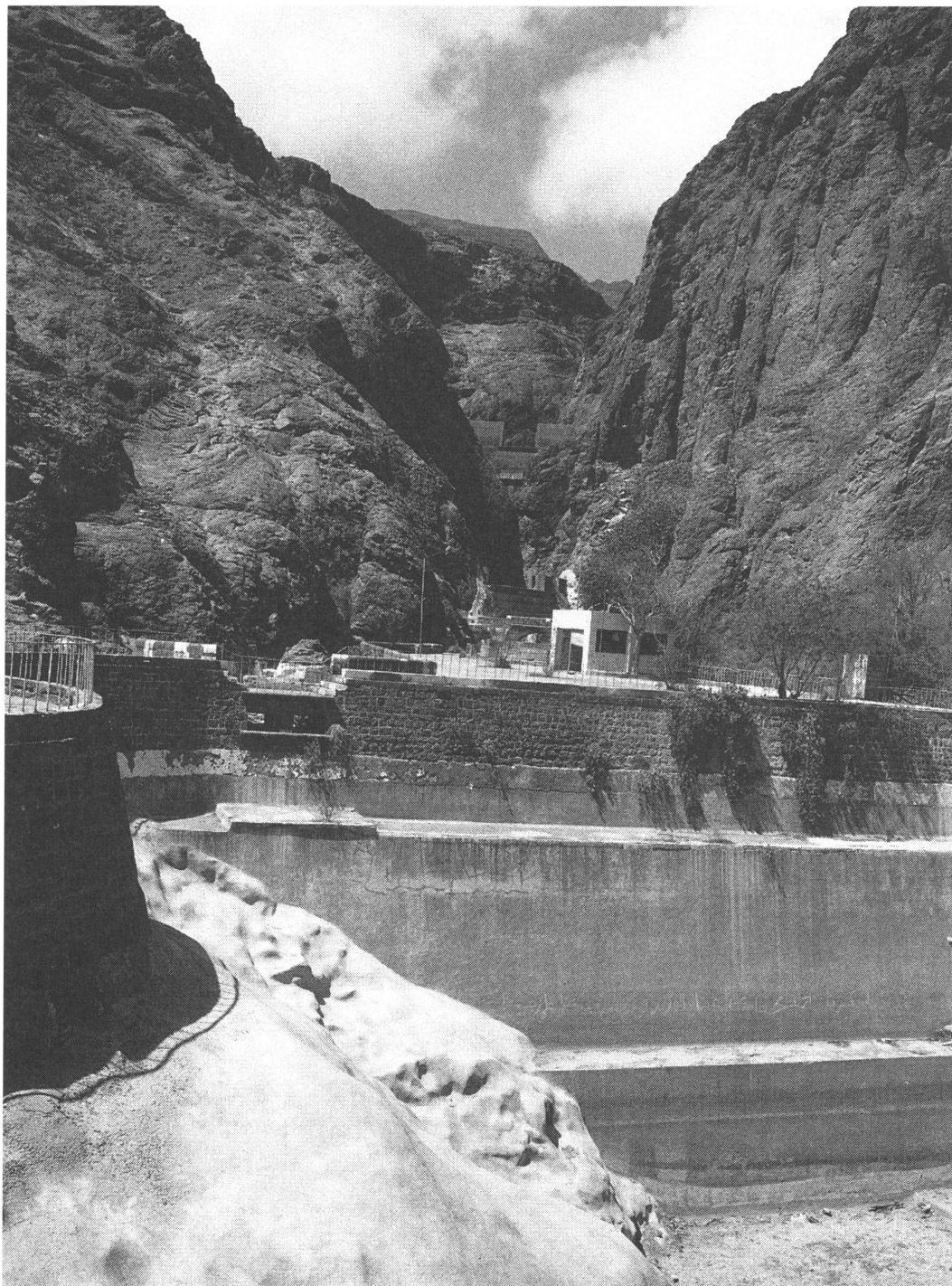
アデンにある巨大な貯水タンクもルクマーンの偉業の一つである、とされている。マアリブダムと比して、アデンの方はいくつも上下に続くダム、貯水池群からなっている。こちらの方はB.C1000年頃ヒムヤル王朝時代に築造されたものとも言われているが、もとより推定にすぎず確かなことではない。むしろ民間伝承ではその規模の大きさ、巨大さから巨人族に属し、アデン地方で長い生を送ったことになっているルクマーンの偉業である、とするのが一般である。

アラビア半島の南端を占め、アフリカ、アラビア、インドの海洋域に面し、紅海、アラビア海に接するアデンは地の利を持って現在に至るまで繁栄している。今でこそシャイフ・オスマン地区やリトル・アデンなどアデン湾岸まで市街地の発展を見たが、古来アデンと言えはこの岬の東部を占めるスィーラ Ṣīrah と呼ばれる突き出た火山岩に囲まれた地域であった。このスィーラとは「囲まれた地」そのものが原義である。ポルトガル、英国に支配されてから溶岩地域の意味でクレーター Crater と外国人に呼ばれ、その名で知られるようになった。背後を溶岩山に囲まれているスィーラは東部海岸に港を持ち、背後には東方にアイダルス山(標高231m)が、また中央から西方に向かって長大なシャムシャーン山(553m)がクレーターを抱えこむようにそびえる。(なおアイダルスのふもとに聖人アイダルスの由緒あるアイダルスモスク Masjid 'Aidarūs があり参拝客を集めている)。そしてこの両山の傾斜を利用して巧みに岩を穿ていくつもの貯水池が上から段状に作られており、壮観である。

この巨大なダムは我々外国人にはアデントランク Aden Tanks として周知であるが、現地の人々はサハーリージュ・タウィーラ Ṣahārīj al-Ṭawīlah, 略してサハーリージュとして知られる。Ṣahārīj とは ṣahrīj (貯水池)の複数であり、タウィーラとはクレーター地域のシャムシャーン山の溪谷に続く細長い地区の名であるから、「タウィーラ貯水池群」の意味である。山峡いに上から次々と貯水池が作られ、下にゆく程規模が大きくなり、全部で18あるという。我々一般人がゆくことができるのは下から六つ目までで、上に行く程急な階段で結ばれ縁が歩けるようになっている。6つ目まで上ってゆくと、その上は見上げても全部が眺望できるわけではない。全部貯水できればその水量5000tと言われているが、果たしてどうであろうか。ともかくもこの溶岩台地に住む人口の水を一手に引受けていた水瓶であったことは確かである。

現在ではきれいに整備されており、公園として市民の憩いの場所ともなっている。入口は麓にあるので、ある程度の広さがあり木々も植樹され緑豊かになっている。1番上には大変な労力でダム状の大きな池が作られ、それはかつては Birket 'Anbar (竜涎香池)として親しまれていたのだが、現在では訪れることはできない。地形利用からも分かる通り、大きなサフリーズは低地のものであって、上にゆく程傾斜が急で池の規模は小さくなり、水の受け入口と出口とが工夫されている。それ故それぞれの名前よりアブー・シルスィラ Abū Silsilah (数珠つなぎのもの)として親しまれている。アブー・シルスィラの中、下4つは岩地から急に平地に開いているため大きな水瓶となっていて壮観である。中段にある2つ目が最大で、内部の側壁は4段になっており、段が違う毎に互い違いに階段が設けられ、底にまで通じている。

最上の4段目の側壁は石を積み上げたもので下から上ってくる時は眺き込むような高い積み上げとなっており、その構造は上流の高く上った方から外観するとこの石の組み方がよく分かる。このサフリーズの上流からみて左手の中途に、狭まっている部分があり、3段目の段辺りに大きな木の渡してある部分が残っている。この木の残骸は通路の橋として渡されたものか、あるいは井戸としての骨組であったのか、気にかかった。



[写真 4]

アデタンク。第3貯水池から上部を見る。中腹部の凹形壁の下までしか行くことができない。

溶岩の岩場で狭まり、しかも急に傾斜の加わる上のサフリージュは細長い形になり連絡通路も当然ながら細く1ヵ所のみに限定される。水路の上を渡る橋も工夫され、水流側の下段はいずれもアーチとなっている。歩行する上段の方は低い側の方は平らにぶ厚く石が積み上げられているのに対し、上流の方は石組もうすく、アーチそのものをなぞらえた太鼓橋となっている。そして危険な所には鉄柵が設けられ安全の配慮がなされている。我々が見学できるのは6番目のサフリージュまでである。この先は岩肌が極めて狭くなり、しかも急な傾斜である。見上げると恐らく下から7番目に当るであろうサフリージュの堰の石組みが凹形に高く張られている。それも相当距離をおいて、この窪みから狭い水道が兩岸深くえぐられる形でこの第6サフリージュで堰き止められている。下流サフリージュすべてが干上っている中で、ここだけは水があった。眺き込むと、水が深い底に緑色を呈し湛えていた。この緑色の水面に赤トンボが数匹ノンビリ飛んでいるのが印象的でもあった。一瞬、白と薄青黒い少し大型の小鳥が目を横切った。鳩であったか、しょうびん（かわせみ）の類であったか。

この貯水ダムについて、下から2番目の大池の目立たないその横に碑があった。それには1899年2月20日、当時アデンを領有していた大英帝国の政治顧問 C. A. Cunningham の記した碑であった。それによれば「このアデントankのことは、最初の建設がどんなものであったか正確には全く分かっていない。1854年 Sir Lambert Playfair 上官代理が当時アデン総領事副官であった時、偶然発見したもの」と言う。そして「これらの貯水ダムは丘（hills）から屑や残骸で全く隠されていたものを、英政府肝入りで発掘し、使用できるようにした。そして下の方の丸い貯水池、これは Playfair Tank の名を付けられたが、然る後にきれいにされた。すべてのタンクの貯水総量は24万 imperial（英国規格）ガロンを超える」とある。

ルクマーンの事跡を追っている私は、この碑を見て、半分驚き、半分憤慨した。というのも、この碑は大英帝国の恩恵と尊大さを表明したもので、今ここにこうあるのは英国が埋もれた遺物を発見し、再使用するまでの修復作業を行った事を自慢気に記しているわけである。現地の人々、イエメン、アラブの底力を馬鹿にしたものである。それではアデンの住人は、このクレーター（溶岩台地）に囲まれた港町で、どのような給水をしていたのであろうか。このタンクを用いていなかったとしたら、水は狭い陸地の先からこの突き出た孤島となっている土地にロバやラクダで運び込んでいたと言うのだろうか。もっと愚かな表記は「丘からの屑や残骸で埋まっていた」との註記である。溶岩の山であるシャムシャーン山の狭谷を巧みに利用して作ったこのダム群に、どこから屑や残骸が落ちてくるのであろうか。上から落ちてくるものは溶岩が少しずつつくずれて風化した小石や砂になったもののみであり、極めて少量である。それによって覆い尽くされていたことは不可能だ。また下に生活するアデン住民がゴミ捨て場としてわざわざ上ってきて、これらの貯水ダム群を屑や残骸で埋め尽くすことも不可能である。考えられることは、この後者のケースであって、それも最下のダムを埋めていたことぐらいにすぎず、それを英国が持前の財力と軍力で使用できるようにしたぐらいのものであろう。誇らしげにそこだけ Mayfair Tank などと名付けて。



[写真5]

アデントank。上手から町タウィーラを眺む。上手は通路が狭く危険箇所は鉄柵が施されている。
この橋の下を水流は左右に分かれ、真中が歩道となっている。

サハーリジェ・タウィーラ、即ちアデントankが埋もれていて、使われていなかったか。14世紀前半アデンを訪れたイブン・バットウータ（1304～68）はこのアデン・タンクについて次のように述べている。「山々がアデンの周囲を取り囲んでいるために、ただ一方の側を除いてそこに至る入口は無い。そこは大都会であるが、農耕地、樹木や飲料水も無い。そこには、雨季に雨水を溜める幾つかの貯水ダムがある。なぜならば、水場はその町から離れたところにあつて、アラブ遊牧民がたびたび水場との連絡を止めることがあり、彼らは町の住民と水場との連絡を妨害して、金や衣服を賄賂として要求するほどである。そこは酷い暑さのところである。」（資料⑦Ⅲ pp.132-33）

上記の碑文に対する強烈な反証である。ましてや陸海の要衝を占めるアデンは歴史的にいてもますます発展して給水が必要としていた。この延長線上に大航海時代、植民地主義、帝国主義の時代があるわけで、事情は衰微して、また廃墟と化して、給水が不用になり、貯水タンクも崩れるに委された、と言ったものではなかったはずだ。

シャムシャーン山には他にもかつてはいくつかのダムがあり、その1つは同じクレター地区の西方 Khussāf 地区の上流にも造られていたというのが訪れることができず定かではない。

またサラディンのアッユーブ朝期にも改良が加えられたり、新にダム建造の試みがあったという。

引用文献・資料ナンバー

- ① Abū Hilāl al-‘Askarī : Jamharat al-Amthāl, Dār al-Fikr (Beirūt), I - II 卷, 1408/1988.
- ② Kamāl al-Dīn Damīrī: Ḥayāt al-Ḥayawān, Dār al-Taḥrīr (Cairo), I - II 卷, 1965.
- ③ al-Ḥasan al-Hamdānī: al-Iklīl, [Eng. tra. by N.A. Faris, The Antiquities of South Arabia, Hyperion Press, Inc, (USA), 1981.
- ④ J. E. Hanauer: The Holy Land, Myths And Legends, Guernsey Press (London), 1907.
- ⑤ ‘Amrū al-Jāḥiẓ: al-Bayān wal-Tabyīn, Mu’assas al-Khānjī (Cairo), I - II 卷, 1367/1948.
- ⑥ al-Jāḥiẓ: al-Ḥayawān, Maṭba‘ah al-Bābī al-Ḥalabī (Cairo), I - VII 卷, 1950.
- ⑦ Ibn Baṭṭūṭah: al-Riḥlah (邦訳, 『大旅行記』, 家島彦一訳, 平凡社 I - VIII 卷, 1998)
- ⑧ Ibn Qutaybah : al-Ma‘ārif, Dār al-Ma‘ārif (Cairo), 1388/1969.
- ⑨ ‘Alī al-Mas‘ūdī: Murūj al-Dhahab, Dār al-Andalus (Beirut), I - IV 卷, 1385/1965.
- ⑩ Aḥmad al-Maydānī: Majma‘ al-Amthāl, Maṭba‘ah al-Sunnah al-Maḥdiyyah (Cairo), I - II 卷, 1374/1955.
- ⑪ al-Qurṭubī: al-Jāmi‘ li-Aḥkām al-Qur’ān, Dār al-Sha‘b (Cairo), n.d. I - VIII 卷.
- ⑫ Jalāl al-Dīn al-Suyūṭī: Bughyah al-Wu‘āh, Maṭba‘ah al-Bābī al-Ḥalabī, I - II 卷, 1384/1964.
- ⑬ Ibn Jarīr al-Ṭabarī: Ta‘rikh al-Rusul wa-al-Mulūk, Dār al-Ma‘ārif, 第 I 卷, 1380/1960. [(英訳) The History of al-Ṭabarī, II 卷. tr. by. William Brinner, Univ of New York Press, 1987, 参照]
- ⑭ Yāqūt al-Ḥamawī : Mu‘jam al-Buldān, Dār Beirūt, I - V 卷, 1404/1984.
- ⑮ al-Zamakhsharī: al-Kashshāf, al-Bābī al-Ḥalabī, I - IV 卷, 1385/1966.
- ⑯ al-Zamakhsharī: al-Mustaqṣā fī Amthāl al-‘Arab, Hayderabad (India), I - II 卷, 1381/1962.